

ヨハネ20：1-31 イエスの復活に対する反応

20:1 さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に来た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。 20:2 それで、走って、シモン・ペテロと、イエスが愛された、もうひとりの弟子とのところに来て、言った。「だれかが墓から主を取って行きました。主をどこに置いたのか、私たちにはわかりません。」 20:3 そこでペテロともうひとりの弟子は外に出て来て、墓のほうへ行った。 20:4 ふたりはいっしょに走ったが、もうひとりの弟子がペテロよりも速かったので、先に墓に着いた。 20:5 そして、からだをかがめてのぞき込み、亜麻布が置いてあるのを見たが、中に入らなかった。 20:6 シモン・ペテロも彼に続いて来て、墓に入り、亜麻布が置いてあって、 20:7 イエスの頭に巻かれていた布切れは、亜麻布といっしょにはなく、離れた所に巻かれたままになっているのを見た。 20:8 そのとき、先に墓に着いたもうひとりの弟子も入って来た。そして、見て、信じた。 20:9 彼らは、イエスが死人の中からよみがえらなければならないという聖書を、まだ理解していなかったのである。 20:10 それで、弟子たちはまた自分のところに帰って行った。 20:11 しかし、マリヤは外で墓のところにたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。 20:12 すると、ふたりの御使いが、イエスのからだが置かれていた場所に、ひとり頭のところ、ひとり足のところ、白い衣をまとってすわっているのが見えた。 20:13 彼らは彼女に言った。「なぜ泣いているのですか。」彼女は言った。「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」 20:14 彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。しかし、彼女にはイエスであることがわからなかった。 20:15 イエスは彼女に言われた。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、それを園の管理人だと思って言った。「あなたが、あの方を運んだのでしたら、どこに置いたのか教えてください。そうすれば私が引き取ります。」 20:16 イエスは彼女に言われた。「マリヤ。」彼女は振り向いて、ヘブル語で、「ラボニ(すなわち、先生)」とイエスに言った。 20:17 イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る』と告げなさい。」 20:18 マグダラのマリヤは、行って、「私は主にお目にかかりました」と言い、また、主が彼女にこれらのことを話されたことと弟子たちに告げた。 20:19 その日、すなわち週の初めの日の夕方のものであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。「平安があなたがたにあるように。」 20:20 こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ。 20:21 イエスはもう一度、彼らに言われた。「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします。」 20:22 そして、こう言われると、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。 20:23 あなたがたがだれかの罪を赦すなら、その人の罪は赦され、あなたがたがだれかの罪をそのまま残すなら、それはそのまま残ります。」 20:24 十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らといっしょにいなかった。 20:25 それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と言った。 20:26 八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って「平安があなたがたにあるように」と言われた。 20:27 それからトマスに言われた。「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」 20:28 トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」 20:29 イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」 20:30 この書には書かれていないが、まだほかの多くのしるしをも、イエスは弟子たちの前で行われた。 20:31 しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子

キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。

導入

ヨハネ20章の学びに入る前に、ここに登場する話の背景をお話させていただきます。

2000年前、イエス・キリストという人が地上にいました。この人は、身分の低い家に生まれました。父親は大工で、その子は自分の実の子ではないと言いました。母親は、その赤ちゃんが奇跡によって与えられたと言いました。イエスはたった12歳で、当時の宗教指導者たちを驚かせるような知識を披露しました。30歳になったころ、自分自身についてある主張をし始めました。

バプテスマのヨハネという人が、イエスについて紹介してくれます。ヨハネは、イエスがこの世の罪を取り除く神の小羊だと言いました。また、最初に弟子になった者たちは、イエスが神の性質を持っていることに気づきました。イエスは全知全能で、誰がいつどこで何をしていても、それを知っているようでした。

イエスは病人を癒し、目の見えない人を見えるように、また足の不自由な人を歩けるようにしてあげました。悪霊を人から追い出したり、ひとりの少年のお弁当を使って5,000人に食事をさせたりしました。水の上を歩き、風や波も思いのままです。イチジクの木を呪うと、その木は枯れてしまいました。イエスは、人の姿を取った神であることを証明する多くの奇跡を起こしました。

イエスは自分自身が「世の光」「天からのパン」「道」「真理」「いのち」と言いました。自分の体が壊されても、3日でそれはよみがえると断言しました。

イエスは、罪を憎みましたが、罪人は愛しました。必死で荒探しをした人たちもいましたが、イエスの人格や性質に誤りは見つかりませんでした。一度も過ちを犯したことの無い、完全に罪のない人だったのです。

けれども、当時の宗教指導者たちは、イエスのことが気に入りませんでした。イエスの主張を受け入れず、自らを神と名乗る「冒涇」の罪でイエスを告発しようとしていました。

公正でない裁判が行われ、裁きを下す本人はイエスを有罪と認める内容はないとしながらも、群衆に屈して、冒涇罪の罰としてイエスを十字架刑に処すことを許可しました。

イエスが十字架にかかっていたとき、日中であつたにもかかわらず、その地域全土が3時間も暗闇に覆われました。十字架のそばにいた番兵たちは、イエスが神の子であつたと確信したといひます。

イエスの死後、ヨセフという裕福な人がイエスの埋葬許可を得て、岩を掘って造った墓にイエスの遺体を納めました。イエスが埋葬された墓には、ローマ帝国の番兵が配置されました。

イエスに従っていた弟子たちは、なぜ神の力を自由に使えるイエスが無実の罪をかぶって十字架にかかったのかよく理解できませんでした。

しかし後になって、クリスチャンを迫害する立場から転じてクリスチャンになった人がこう言いました。

罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。(Ⅱコリント 5:21)

このことを弟子たちは後になるまで理解できませんでした。イエスが亡くなった当時、弟子たちは失望し、心が引き裂かれる思いでした。弟子のひとりペテロは、イエスを知らないと言ったほどです。

こういった背景を踏まえて、ヨハネ20章の話を見ていくことにしましょう。

これはすばらしいお話です。ある女性の涙が喜びに変えられた話です。悲しみでいっぱいだった弟子たちの心はうれしさに満ちました。疑っていた弟子も、信じる弟子に変えられました。

では、話の内容を見ていきましょう。

イエスは金曜日に十字架にかけられ、この場面は日曜の早朝です。

マグダラのマリヤが墓に着くと、墓の入口にあった石が取りのけてありました。

マリヤは弟子たちのところへこのことを知らせに走って行き、弟子たちはそれを確かめに来ました。ペテロが墓の中に入ると、亜麻布がそこに置いてありました。7節には、ユダヤ人の人やユダヤの文化をよく知っている人でなければ気づかない重要な内容が記されています。

7節で、イエスの頭に巻かれていた布切れは離れた所に巻かれたままになっていたとあります。

ユダヤ人の文化で、食事の場所が気に入らない場合、ナプキンをある一定の形にたたんでおき、その場所が気に入らなかったのが帰るという意思表示に使います。もしかすると、イエスは布をその形にたたんで、墓にいるのが不満であることを示したのでしょうか。もしそうなら、ペテロはそれを見て微笑んだことでしょうか。イエスは墓にいることを良しとせず、さらにすばらしいことへと進んでいきました。

8節で、「見て信じた」とありますが、この時点でその人が何を信じたのかははっきり記されていません。ただ、イエスの残したしるしを見て、元気づけられたことでしょうか。

10節には、弟子たちが墓を離れて家に帰ったとあります。

マリヤはひとり残され、墓の外で泣いていました。

マリヤが墓の中を覗き込むと、そこにふたりの天使がいました。天使は、なぜ泣いているのかとマリヤに尋ねます。

マリヤは答えました。「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」

そして振り向くと、そばに誰かが立っているのが見えました。はじめマリヤは、それが園の管理人だと思いましたが、「マリヤ」と名を呼ばれると、すぐにそれがイエスだとわかりました。

イエスが生きていることがわかって、マリヤの涙は喜びに変えられました。

イエスはまずマリヤの前に姿を現し、彼女の心に届くことばを掛けました。多くを語る必要はありませんでした。その姿だけで十分だったのです。

すぐさまマリヤは弟子たちにこのできごとを知らせに行きました。

よみがえりのイエスが次に姿を現したのは、その日の夕方でした。

弟子たちはユダヤ人を恐れて、部屋に閉じこもっていました。

イエスは、鍵のかかった扉を通り抜け、弟子たちにヘブル語で「シャローム」つまり「平安があなたがたにあるように」と言いました。イエスは、弟子たちに手やわき腹を見せました。なぜでしょう。

彼らの罪のために十字架で死んだイエス自身であることを知らせたかったのです。イエスがよみがえったことについて、疑いの余地を残したくなかったのでしょうか。

イエスは、「平安があなたがたにあるように」と改めて言います。そして、「父がわたしを遣わしたように、わたしもあなたがたを遣わします」と弟子たちに言いました。神はイエスを天国か

らこの世に遣わしました。それは、この世の罪のために十字架にかかって死ぬためです。そして今、イエスの復活を含む一連の出来事を世間に知らせるために弟子たちが遣わされるのです。

イエスは、弟子たちに息を吹きかけ、「聖霊を受けなさい」と言いました。

これは、弟子たちのためだけに個別に聖霊が降臨したわけではありません。まもなくやってくることの象徴でした。その証拠に、弟子たちはこの時点で変化を体験していません。ヨハネは、将来起こる出来事を指してイエスが言ったことばをある一定の方法で記録していました。

ヨハネ13：8 ペテロはイエスに言った。「決して私の足をお洗いにならないでください。」イエスは答えられた。「もしわたしが洗わなければ、あなたはわたしと何の関係もありません。」

イエスはここで、霊的に洗いよめることを指していました。

同様に、22-23節で、イエスは弟子たちに心の準備をさせるため、まもなく聖霊を受け、福音を伝えるようになると言いました。彼らが福音を伝えて人々が受け入れれば、その人たちの罪は赦されます。福音を受け入れなければ、その人たちの罪はそのまま残ります。弟子たちの役目はただ福音を伝えることでした。罪を赦す力は彼らにはありません。それは、イエスの働きだからです。

よみがえったイエスが姿を現したもうひとつの場面に注目しましょう。24-29節です。イエスはトマスの前に姿を見せます。

8日が過ぎて、弟子たちはまた室内に閉じこもっていました。このときは、トマスも他の弟子たちといっしょでした。トマスは、「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません」と言って、イエスが復活したことを信じませんでした。

イエスはふたたび、鍵のかかった扉を通り抜け、弟子たちにヘブル語で「シャローム」つまり「平安があなたがたにあるように」と言いました。

そしてトマスに、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」と言いました。

トマスはどれほど驚いたことでしょうか。「私の主。私の神。」と叫びました。

イエスは言いました。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」

よみがえったイエス・キリストが姿を現した3つのできごとから、学べることは何でしょうか。

1. マリヤ－イエスは、マリヤに弟子たちへのメッセージを託しました（17節）。その内容は、イエスが父のもとに帰るというものでした。このメッセージの重要性は、ヨハネの福音書全体に照らして見なければなりません。イエスが天から来たとか天に帰るとヨハネが記した際、この地にイエスが来た目的と関連しています。その目的とは、罪の赦しのために十字架で死ぬことでした。

(ヨハネ3：13-16、13：3、16：28、17：4-5)

父のもとに帰るといメッセージは、イエスの死と復活が罪の赦しのためであることを思い起こさせてくれたでしょう。イエスは天に帰り、彼らがそこに行けるよう道をひらいてくれるのです。イエスは天に彼らのための場所も用意してくれます。神は、イエスが十字架上で人の罪のためにささげたあがないのいけにえを受け入れてくれました。十字架での業は完了したので、イエスは天に帰ることができます。

あなたがたの父、あなたがたの神と強調することで、イエスは、私たちの罪に対する神の怒りがおさまり、新しい関係が可能になったことを示します。こうして人は、イエスと同じように神に近づくことができます。ハレルヤ。神をたたえます。

ここで大切なのは、神が私たちの父となれるということです。個人的に関われる神となってもらえるということです。イエスが神とつながっていたように、私たちも神につながる事ができるのです。

条件はたったひとつです。それは、自分の罪を認め、イエスが十字架上でしてくれたことを信じることです。イエスは私たちの身代わりでした。罪のある私たちのために、罪のない人が死んだのです。

このことを心に受け入れるなら、罪が赦されたことで、罪悪感の涙は喜びの涙に変えられます。

2. 弟子たち - 今日読んだ聖書箇所から、罪の赦しの福音を伝えるようイエスが弟子たちを遣わしたことがわかりました。イエスは、信じる人の罪を赦し、信じない人の罪はそのまま残すと約束しました。

ここで大切なことは、私たちにはこの地上で務めがあるということです。伝えれば誰でも信じるとはイエスは約束しませんが、信じる人には赦しが与えられると約束してくれます。

このメッセージを周囲の人たちに知らせる責任が私たちにはあります。成功するかどうかは問題ではありません。耳を貸してくれるすべての人に福音を伝えることに忠実かどうかは問題です。結果はイエスと聖霊の働きに任せましょう。

皆さんはこれを忠実にを行いますか。簡単なことではありませんが、神は必ず皆さんの努力を祝福してくださいます。

3. トマス - トマスは、他の弟子たちの言うことを信じるより、自分の目でイエスを見て確かめたいと思いました。イエスは、トマスの要求に優しく答えてくれました。

けれども、ヨハネの福音書は一貫して、イエスの奇跡ではなくことばに注目するよう促します。

イエスは29節で、本当の幸いは、神を見ることではなく、使徒たちのことばを信じることにあると言います。

「見ずに信じる者は幸いです。」がイエスのことばです。

今日、幸いでありたいと望むなら、イエスのことばを信じましょう。聖書が神から私たちへのことばだと信じましょう。私たちの人生の書物、そしてすべての悩みに答えてくれることばだと信じましょう。

イエスを信じるのに、しるしや奇跡は必要ありません。聖書のことばを信じて、祝福を受けましょう。

イエスの復活は、終わりの日に私たちの弱い体を神がよみがえらせる力があることを証明してくれました。イエスとその復活を信じることは、私たちの将来にとって唯一の答えです。今日、イエスを信じますか。